

—茨城県土浦市—

# 谷原門C遺跡（第2次調査）

—宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2007

株式会社 協栄工務店  
土浦市教育委員会  
山武考古学研究所

## 序

土浦市は霞ヶ浦や桜川、花室川など豊かな水資源に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため、市内には集落跡や貝塚、古墳などの遺跡が数多く存在しています。遺跡は、当時の人々の生活や環境などを知る手がかりとなります。また、現代に生きる私たちが、豊かな生活を送ることができる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私たちの大切な任務であり、郷土の発展のためには重要なことです。

この度、株式会社協栄工務店の宅地造成事業に伴い、谷原門C遺跡の一部について記録保存を目的とした発掘調査が行われました。

調査の成果は本文に記載されている通りですが、土浦市における古代史の解明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが調査から報告書刊行にあたり、多大なご協力をいただきました株式会社協栄工務店の方々をはじめ、調査を担当した有限会社山武考古学研究所、ご指導、ご協力を賜りました関係者の方々に対し、厚く御礼申し上げます。

平成19年7月

土浦市教育委員会  
教育長 富永善文

## 例 言

1. 本書は、株式会社協栄工務店の宅地造成事業に伴う、茨城県土浦市中字谷原門1472-1番地に所在する谷原門C遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、株式会社協栄工務店の委託を受けた山武考古学研究所が土浦市教育委員会の指導のもと実施した。
3. 調査の体制及び期間は下記の通りである。

担当者 確認調査：関宮正光（山武考古学研究所首席研究員）  
本調査：松田政基（山武考古学研究所調査研究室長）

作業員 発掘調査：表 豊 高木珍明 森永典昭 寺崎清次 神谷 明 冨永武志 秋本博一  
整理調査：木村春代 大関美穂







調査期間 確認調査：平成19（2007）年1月22日～1月26日  
本調査：平成19（2007）年3月12日～3月26日
4. 本書の編集は松田、関宮が担当し、執筆分担は、第1章第1節が黒澤春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場）、ほか関宮である。
5. 調査により得られた出土品と記録は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場で保管・管理している。
6. 現地・整理調査に際し、下記の方々にご指導・ご協力を賜りました。（敬称略・順不同）

茨城県教育庁文化課 株式会社協栄工務店

## 凡 例

1. 本書をはじめとして調査資料・遺物注記に使用した略号は下記の通りである。

谷原門C遺跡第2次調査…NYC2  
住居跡…SI 土坑…SK カマド…カ 遺構外…外
2. 本書における遺構の規模は、中軸線上の壁上端を計測した。主軸方向は住居跡の場合カマドを通る軸線とし、土坑は長軸線が座標北に対して何度偏斜しているかを記載した。深度については検出面を基準としている。
3. 土層や遺物における色相は、農林水産省農林水産技術会議事務局が監修の『新版標準土色帖』を使用した。
4. 本書に用いた図面縮尺と記号、スクリントーンは下記の通りである。

縮尺	遺構…1/60	遺物…1/3
記号	——— 硬化面	● 土器
スクリントーン	遺構…  地山	 カマド袖
	遺物…  繊維混入	 火床面  掘り方
		 黒色灰皿
5. 出土遺物観察表中の計測値は、（ ）が復元値、<>が残存値を示す。
6. 掲載した遺物には、遺構毎に番号が付されており、本文・表・図面・図版共に一致している。
7. 調査資料には、遺物・図面・写真の各台帳があり、検索可能な状態に整理してある。

# 目次

## 本文目次

序

例言 凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過	第1節 調査の経緯	1
	第2節 調査の経過	1
第2章 環境	第1節 地理的環境	1
	第2節 歴史的環境	3
	第3節 谷原門C遺跡の既存調査	3
第3章 調査の概要	第1節 調査の概要	5
	第2節 調査方法	5
	第3節 層序	5
第4章 遺構と遺物	第1節 縄文時代	7
	第2節 奈良・平安時代	9
第5章 総括		20
抄録 写真図版		

## 図面目次

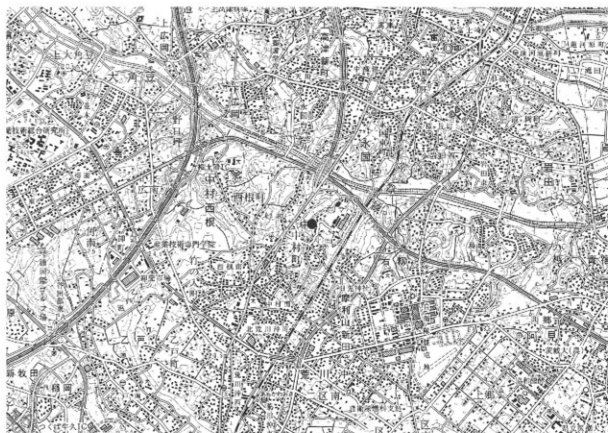
第1図 遺跡の位置	第8図 1号住居跡出土遺物	10
第2図 周辺の地形	第9図 2号住居跡・出土遺物	12
第3図 周辺の主な遺跡	第10図 3号住居跡・出土遺物(1)	14
第4図 確認調査と本調査の範囲	第11図 3号住居跡出土遺物(2)	15
第5図 調査区全体図と基本堆積土層	第12図 3号住居跡出土遺物(3)	16
第6図 縄文時代出土遺物	第13図 1～5号土坑	18
第7図 1号住居跡		8

## 表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表	第4表 3号住居跡出土遺物観察表	17
第2表 1号住居跡出土遺物観察表	第5表 ビットー一覧表	18
第3表 2号住居跡出土遺物観察表		12

## 写真図版目次

P L 1 調査区全景 同現況 基本堆積土層 1号住居跡全景 同土層断面	P L 3 3号住居跡カマド内遺物出土状況 同カマド完掘全景 1号土坑全景 2号土坑全景 3号土坑全景 同土層断面 4号土坑全景 5号土坑全景
P L 2 1号住居跡カマド全景 同カマド袖断面 2号住居跡全景 同土層断面 同カマド内遺物出土状況 同カマド調査状況 3号住居跡全景 同カマド調査状況	P L 4 出土遺物(1) P L 5 出土遺物(2)



第1図 遺跡の位置 (国土地理院作成 1:50,000「土浦」)



第2図 周辺の地形 (明治16年測量 同30年修正 迅速図「土浦」1:25,000に縮小)

## 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査の経緯

平成18(2006)年10月、株式会社協栄工務店より、中地区で予定している宅地造成事業の事前協議書が提出された。事業地内には周知の遺跡である谷原門A遺跡や谷原門C遺跡、南達中A遺跡が存在し、未周知であるが遺跡の可能性のある台地縁辺部も含まれていた。

土浦市教育委員会は事業者と協議を行い、遺跡の有無と密度や性格を把握するため、事業者の協力を得て試掘確認調査を行うことにした。調査は1月22日から26日にかけて市教育委員会指導のもと、事業者から埋蔵文化財業務について委任された有限会社山武考古学研究所が実施した。設定箇所は谷原門A遺跡、谷原門C遺跡、未周知の台地縁辺部である。南達中A遺跡については、現状変更しないため除外した。調査の結果、谷原門C遺跡において奈良・平安時代の竪穴住居跡が確認された。

その後、調査結果をもとに事業者と協議を行ったが、現状保存が困難であることから発掘調査による記録保存を行うことで合意した。2月15日、株式会社協栄工務店、有限会社山武考古学研究所、土浦市教育委員会の3者で、土浦市中地区宅地造成工事に係る埋蔵文化財に関する協定書を締結した。

文化財保護法関係では、埋蔵文化財発掘届(第93条)が1月29日付けで株式会社協栄工務店から、埋蔵文化財発掘調査の届出(第92条)が2月9日付けで有限会社山武考古学研究所から提出され、それぞれ茨城県教育長宛に到達した。

### 第2節 調査の経過

平成19年1月22日から同年1月26日にかけて確認調査を実施した。この結果安定した台地上に位置する谷原門C遺跡で、竪穴住居跡をはじめとする遺構が検出されたため諸手続を経て本調査の運びとなった。

本調査は、3月12日にユニットハウス・仮設トイレを設営して開始する。竪穴住居跡の調査は1号から順次3号へと進める。15日、3号住居跡のカマド調査に着手し、土師器の甕が桶の構材に用いられていることが明らかとなる。16日、1・3号住居跡のカマド調査と併行して土坑の掘り下げに取りかかる。3号住居跡のカマドでは、廃絶時に祭祀行為が行われたと判断され、燃焼部から支脚として使用された礫の上に伏せた状態で高台付椀が出土した。19日、基本堆積上層の記録と旧石器時代の試掘を兼ねてテストピットを掘り下げる。20日、記録主体の調査となるが、本調査における写真撮影は晴天と強風のため良くない。22日、テストピットの掘り下げを武蔵野ローム層下面まで完了する。23日、事業主立ち会いのもと土浦市教育委員会から終了確認を受ける。26日、調査区全景写真を撮影し、器材を撤収して現地における調査を終える。

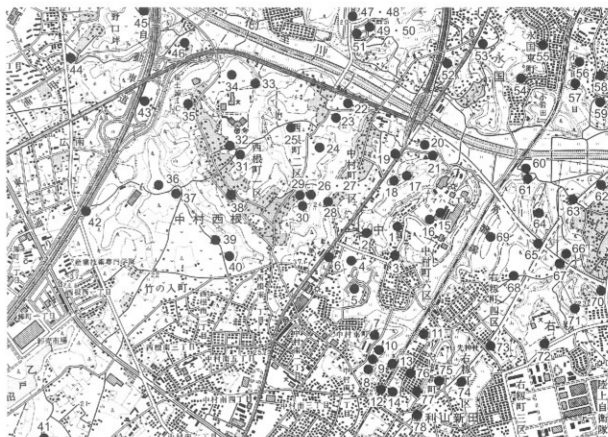
この後、埋蔵物発見届をはじめとする終了書類を関係機関に提出し、整理調査を開始した。

## 第2章 環境

### 第1節 地理的環境

谷原門C遺跡は、JR常磐線荒川沖駅の北東約2.5km付近に位置し、土浦市中字谷原門地内に所在する。

土浦市は、茨城県の南部にあたり、地形的には、北部の新治台地と南部の筑波・稲敷台地、これらを買流して霞ヶ浦に注ぐ、桜川や花空川をはじめとした中小河川流域の沖積低地にそれぞれ大別される。とくに、河川流域には谷津が発達し、台地を浸食しながら複雑な地形を形造っている。



第3図 周辺の主な遺跡（『茨城県遺跡地図』をもとに作成 1：25,000）

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	国史跡	市史跡	古蹟	史蹟	中世	近世	番号	遺跡名	国史跡	市史跡	古蹟	史蹟	中世	近世	番号	遺跡名	国史跡	市史跡	古蹟	史蹟	中世	近世
1	谷那門古遺跡		○	○	○	○		27	後期古墳						○	63	和台遺跡	○	○	○			
2	谷那門B遺跡						○	28	横江堂所在塚						○	64	水園跡美濃跡	○	○	○			
3	谷那門A遺跡		○	○	○			29	白濁石化層						○	65	水園跡	○	○	○			
4	天和遺跡		○	○	○			30	白濁遺跡					○	○	66	阿久根遺跡				○	○	
5	熊ノ台遺跡		○	○	○			31	安勝台遺跡				○	○	○	67	オノノ入遺跡				○	○	
6	宮久島一宮屋							32	中野台遺跡				○			68	新妻白遺跡				○	○	
7	水の宮北遺跡		○					33	平輪堂古墳群				○			69	いさろ遺跡				○	○	
8	水の宮南A遺跡		○	○	○			34	根崎遺跡				○			70	塚田遺跡				○	○	
9	水の宮南B遺跡						○	35	二又遺跡				○	○	○	71	石神ノ下遺跡				○	○	○
10	水の宮南C遺跡						○	36	弥生遺跡				○			72	平洋遺跡				○	○	○
11	降船A遺跡		○	○	○			37	石巻古墳群				○			73	念代遺跡				○	○	○
12	降船B遺跡		○	○	○			38	西町在塚				○			74	教の内遺跡				○	○	
13	降船C遺跡		○	○	○			39	舟入ノ田所化層				○			75	河野地古遺跡				○	○	
14	幸崎貝塚		○	○	○			40	竹ノ入遺跡				○			76	石神三地区古墳						○
15	高屋遺跡	○	○					41	後門遺跡				○	○		77	石神遺跡				○	○	
16	熊原古墳群							42	西條古墳群				○			78	牛島遺跡				○	○	○
17	菅澤中古墳							43	下武岡遺跡				○			79	新宮遺跡						
18	菅澤中A遺跡		○	○	○			44	大宮豆子原古墳				○	○		80	石神茂岡神社						○
19	菅澤中B遺跡							45	下大角豆遺跡				○			81	小谷遺跡						
20	海邊遺跡		○	○	○			46	下大角岡山遺跡				○			82	石神古墳群				○	○	
21	海邊古墳群							47	十三塚遺跡				○	○	○	83	石神貝塚遺跡				○	○	
22	新野平遺跡		○	○	○			48	十三塚古墳				○	○	○	84	宮前遺跡				○	○	○
23	藤原遺跡		○	○	○			49	宇家ノ塚古墳群				○			85	櫻岡遺跡				○	○	
24	平代遺跡		○	○	○			50	宇家ノ塚B遺跡				○			86	柳山遺跡				○	○	
25	阿部古墳群		○	○	○			51	宇家ノ塚A遺跡				○			87	柳山山頂				○		
26	大日古墳		○	○				52	西井遺跡				○	○		88	柳山山頂西側						

遺跡は花室川右岸で、花室川より樹枝状に派生する谷津に挟まれた、標高20～24m前後の台地上を占める。調査地は遺跡範囲の西端部で、西に谷津を臨む台地縁辺部に立地し、谷津との比高差は4mほどである。調査区は耕地として利用されていたとみられるが、現況は荒蕪地であった。

## 第2節 歴史的環境

水利に恵まれた環境からか、花室川流域の谷津によって開析された台地上には、旧石器時代から近世に至る遺跡が数多く分布する。ここでは、本遺跡周辺の遺跡を発掘調査をもとに概観してみる。

土浦市では現在50ヶ所以上で旧石器時代の遺跡が発見されており、とくに、花室川流域はナウマン像の化石が出土することでも知られる。本遺跡周辺におけるこの時期の遺跡としては、向原・扇ノ台・宮前遺跡などが所在し、向原遺跡からは安山岩製のナイフ形石器・メノウ製石核・黒曜石の剥片が、宮前遺跡からは黒曜石製削器と安山岩製尖頭器などの資料を得ている。

縄文時代では、早期に花室川左岸の水田遺跡で茅山式期の竪穴住居跡、向原・宮前遺跡で陥穴状遺構が確認された。前期では、向原・右初貝塚東遺跡で黒浜式期の竪穴住居跡が、左岸の権現前遺跡では浮高Ⅲ式期の竪穴住居跡が調査されている。中期に至ると右岸台地上に大規模遺跡の埋蔵が認められるようになり、宮前遺跡は中時式期から加曽利EⅣ式期、扇ノ台遺跡は加曽利E式期の集落跡として知られ、宮前遺跡では有段掘り込みの竪穴住居跡が発見されている。さらに周辺はフラスコ状土坑の群在する地域でもある。この後花室川流域の遺跡は中期を境として減少し、後・晩期の遺跡としては扇ノ台・峰崎A・摩利山遺跡など僅かしかみられなくなる。

弥生時代も同様な傾向にあり、水田遺跡で後期の集落が認められるに過ぎない。

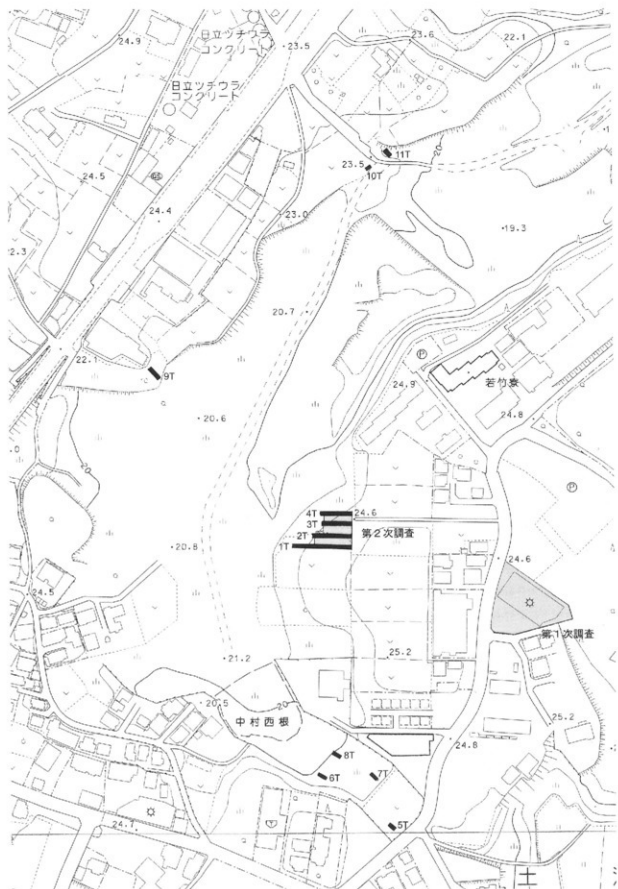
古墳時代に入ると遺跡数は急激に増加し、花室川流域の低地に面して大規模集落が形成されていく、前期から後期へかけての向原遺跡があり、対岸に位置する水田遺跡でも平安時代へ続く大規模集落が確認されている。墓域としては、古墳・古墳群が台地縁辺部に築造される。とくに、字中西根付近に多く分布し、不動堂古墳群・浅岡古墳・大日古墳などが所在する。本遺跡周辺では、北方に馬道古墳群、向原古墳群、東方に寺家ノ後古墳群が知られる。これらの築造時期については、向原古墳群をはじめとして後期・終末期に属するものが大多数を占めるものと考えられている。

律令制下における当地は、「和名抄」にみえる常陸国信太郡に属していたと推定されており、信太郡は14郷から成り立っていた。扇ノ台遺跡においては、8世紀前半から10世紀前半へかけての竪穴住居跡51軒、掘立柱建物跡57棟、欄列1条、溝跡2条、井戸跡3基が調査され、計画的あるいは企画された集落とされている。出土遺物は、土師器・須恵器などの土器類を中心とし、「中」「筒」「日」の墨書土器が含まれ、郷文では中家郷の拠点集落あるいは中心施設（郷家）であった可能性を指摘している。

## 第3節 谷原門C遺跡の既存調査

谷原門C遺跡は、約24,000㎡に及ぶ縄文時代から中世へかけての集落跡と認識されてきた。考古学的調査の初見は、平成5（1993）年に倉庫建設工事に伴って実施された土浦市遺跡調査会の発掘調査に遡る。第1次調査とされるもので、谷原門遺跡C地点として報告されている。調査範囲は、遺跡の東端にあたり、9世紀前葉の竪穴住居跡1軒と時期不明の土坑1期が検出された。出土品は該期の土師器の甕、須恵器の坏・高台付坏・高台付甕・蓋、砥石などで、甕以外に土師器は認められず須恵器が主体となっていた。なお、須恵器のなかには木葉下空跡群の製品が確認されている。





第4図 確認調査と本調査の範囲 (1:2,500)

## 第3章 調査の概要

### 第1節 調査の概要

#### 1. 確認調査

調査は、開発地の大部分が谷津内に位置するため、掘削を受ける台地上を中心に行った。試掘坑は幅2mを基本とするトレンチ11本である。遺構が確認されたのは、1～4号トレンチを掘り下げた谷原門C遺跡のみで、調査区は安定した台地の縁辺部にあたり、堅穴住居跡を主体とすることから集落の展開を考慮して拡張した。検出された遺構は奈良・平安時代の堅穴住居跡3軒と土坑7基、ピットであった。

なお、遺物の散布が認められた谷原門A遺跡には、5～8号の4本のトレンチを掘り下げたが、埋没谷は確認されたものの遺構は認められず、遺物も表土中の含有であることが明らかとなっている。

#### 2. 本調査

本調査では奈良・平安時代の堅穴住居跡3軒と土坑5基、ピット7基が検出された。土坑は確認調査において7基が認められているが、掘り下げにより2基を擾乱とした。時期については、覆土の状況から住居跡と同時期と判断される。出土品は、土師器の坏・高台付椀・甕、須恵器の坏・高台付坏・高台付盤・蓋・甕、灰釉陶器の碗、土製品の花形土器、鉄製品の鎌?、石製品の支脚などである。須恵器は新治窯跡群の製品で占められ、3号住居跡からは酸化焙焼成の叩丸や壺形土器が出土しており特筆される。また、遺構外ではあるが前期を中心とした縄文土器片が得られており、周辺にこの時期の遺跡が展開することを示唆している。

### 第2節 調査の方法

調査区には世界測地系による国家座標に従って座標杭と水準点を設置し、これを基準に調査を実施した。

遺構調査では、堅穴住居跡は4分割し、土坑は2分割して土層の観察を行いながら掘り下げた。遺物については堅穴住居跡を4分割した地区別の層位毎に取り上げた。カマドは個別に調査を行っている。

記録は、1/100で全体図を作成し、遺構は1/20の平・断面図を基本に、カマドは1/10の縮尺で作図した。写真撮影は、調査の各段階に応じて随時行い、白黒35mm、カラーリバーサル35mm、白黒6×7判を用いた。

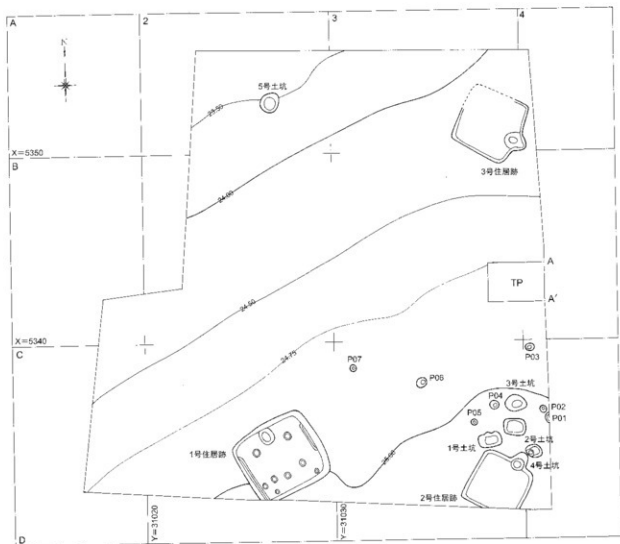
整理調査は発掘調査によって得られた出土品及び記録を対象として行った。出土品は遺物収納箱2箱分で、全量を水洗いした後、インクジェットプリンターを用いて凡例に記載した略号により注記した。接合は遺構出土遺物を中心とし、遺構図は青線にて修正を加え、遺物は報告書掲載分を実施した。

なお、実測遺物については、報告書使用の遺物番号で統一し、出土品については報告書使用と未使用に分けて遺物収納箱に納め、各箱には収納内容を明記している。

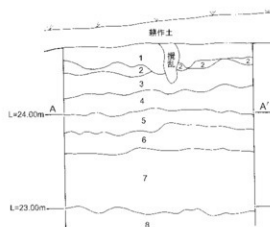
### 第3節 層序

本層序は、標高25mの調査区東端部に設けたテストピットの東壁で記録したものである。テストピットは、現地表面から2.2mまで掘り下げたが常総粘土層には達しなかった。なお、層序の記録にあたっては、旧石器時代の試掘坑を兼ねて東西3m、南北2mの範囲を掘り下げても遺物は出土していない。

耕作土下の第1層は明黄褐色土層で、ソフト化したローム層である。僅かながらガラス質のバミスが確認される。第2層は始良・丹沢火山灰層(AT層)となり、第1層より明るく、白色・ガラス質のバミスを含む。第3層はにぶい黄色土で、硬質ロームブロック、明黄色の小ブロックが混じる。第4層は第2黒色帯に相当し、第5層の明黄褐色土層を経て第6層の武蔵野ローム層となり第7・8層へと続く。



調査区全体図 (1 : 200)



基本堆積土層図 (1 : 40)

基本堆積土層

- |           |                                               |
|-----------|-----------------------------------------------|
| 1 樹黄褐色土   | 2. 516/6 ソフトローム。僅かにガラス質パミスが認められる。             |
| 2 樹黄褐色土   | 2. 517/5 1層より劣るく白色パミス・ガラス質パミス (A下層) を含む硬質。    |
| 3 に薄い黄褐色土 | 2. 516/4 ブロック状の硬質。ロームブロック多数にきみ、明黄色の小ブロックが混じる。 |
| 4 黄褐色土    | 2. 515/3 第2集金層に該当する。黒褐色・白色粒を含む。硬質。            |
| 5 赤褐色土    | 2. 516/6 赤色粒を含む。硬質。                           |
| 6 黄白色土    | 2. 515/4 5層よりやや軟らかい。次層野ローム前に相当。               |
| 7 オレンジ赤色土 | 2. 514/4 赤・黒色粒を含む。硬質。                         |
| 8 オリーブ褐色土 | 2. 514/3 7層より硬質。                              |



第5図 調査区全体図と基本堆積土層

## 第4章 遺構と遺物

### 第1節 縄文時代

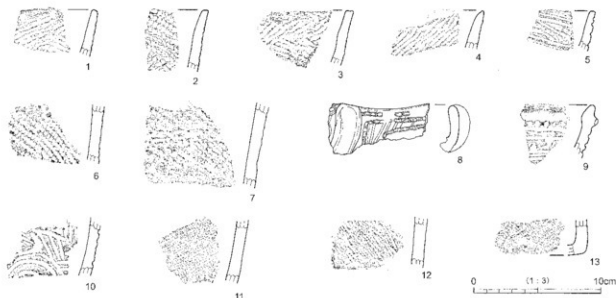
#### 1. 概要

本調査において縄文時代の遺構は検出されておらず、1号住居跡の覆土中と、1号住居跡から2号住居跡へかけての間付近から少量の土器片が出土した。細片が多数を占めるため型式学的に特定することは難しいが、黒浜式・諸磯c式・五領ヶ台式の土器片が認められている。

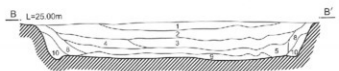
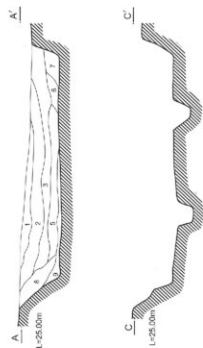
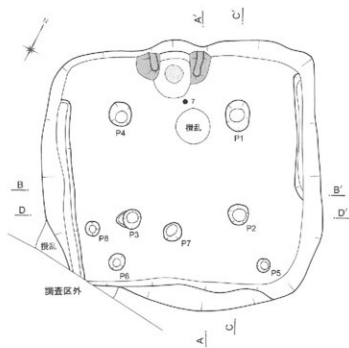
全体としては前期の土器片で占められており、数量的には黒浜式が多く、周辺におけるこの時期の遺跡の展開を示唆する。

#### 2. 出土遺物

縄文時代の遺物は土器片13点を掲載した。1～7は前期黒浜式である。1～4は平縁の口縁部片で、1・3・4が粗い縄文(LR)、2が縄文(RL)を施文する。胎土はいずれも長石・石英・繊維を含み、焼成はやや悪い。色調は1がにぶい褐色(7.5YR6/3)、2がにぶい褐色(7.5YR5/4)、3がにぶい黄褐色(10YR5/3)、4がにぶい黄褐色(10YR7/4)である。5は波状の可能性のある口縁部片で平行沈線により文様を構成する。6・7は胴部片で、粗い縄文を施文する。2点共に胎土は長石・石英・繊維・白色粒を含み、焼成はやや悪く、色調は褐色(7.5YR4/6)である。8は、諸磯c式の可能性のある波状の口縁部片で、条線を地文に半截竹管による刻を施した浮線文を貼り付ける。胎土は長石・石英を含み、焼成は良く、色調は赤褐色(5YR4/8)である。9・10は中期初頭の五領ヶ台式である。9は波状とみられる口縁部片で、沈線・刻目・刺突により文様を構成する。胎土は長石・石英・白色粒を含み、焼成は良く、色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)である。10は胴部片で沈線文を施す。胎土は長石・石英・白色粒を含み、焼成は良く、色調は褐色(7.5YR4/4)である。11～13は中期初頭の土器片とみられる。11・12は胴部片、13は平底の底部片で、11の文様には縄文(無節)を用いる。胎土は長石・石英・白色粒を含み、焼成は良く、色調は褐色(7.5YR4/6)である。



第6図 縄文時代出土遺物

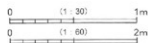
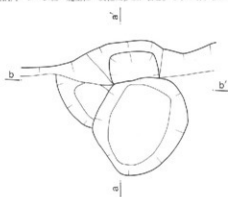
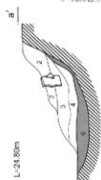
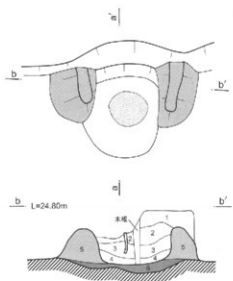


1号住居跡土層説明

- 1 褐色土 7.5184/3 コーム粒まばらに含む, しまり有, 粘性强.
- 2 褐色土 7.5184/3 コーム粒多量に含む, しまり有, 粘性强.
- 3 褐色土 7.5184/4 コーム粒多量に含む, しまり有, 粘性强.
- 4 褐色土 7.5184/2 コーム粒まばらに含む, 粘土粒少量含む, しまり有, 粘性强.
- 5 褐色土 7.5184/6 コーム粒まばらに含む, しまり有, 粘性强.
- 6 褐色土 7.5184/6 コーム粒・炭化粒まばらに含む, しまり有, 粘性强.
- 7 褐色土 7.5184/6 コーム粒以上・コーム殻・炭化粒・炭化粒・粘土粒まばらに含む, しまり有, 粘性强.
- 8 黄褐色土 10185/8 コーム粒・ロームブロックの1~3cm粒まばらに含む, しまり有, 粘性强.
- 9 黄褐色土 10185/8 コーム粒まばらに含む, しまり有, 粘性强.
- 10 黄褐色土 10185/6 コーム粒まばらに含む, しまり有, 粘性强.

1号住居跡カマド土層説明

- 1 褐色土 7.5184/3 コーム粒まばらに含む, しまり有, 粘性强.
- 2 褐色土 7.5184/3 コーム粒・粘土粒まばらに含む, しまり有, 粘性强.
- 3 褐色土 7.5184/6 コーム殻・粘土粒・粘土ブロックの1cm径多量に含む, しまり有, 粘性强.
- 4 褐色土 7.5184/6 コーム粒まばらに含む, しまり有, 粘性强.
- 5 褐色土 7.5186/1 山砂と粘土の混合土, しまり有, 粘性强.
- 6 褐色土 7.5184/1 コーム粒・粘土粒・炭化粒多量に含む, しまり有, 粘性强.



第7図 1号住居跡

## 第2節 奈良・平安時代

### 1. 概要

奈良・平安時代に帰属する遺構は、竪穴住居跡3軒・土坑5基・ピット7基で、調査区の東部及び南部の台地縁辺部に偏在する。

竪穴住居跡は2・3号の規模がほぼ同一となり、1号が若干大きくくなっている。1号は明瞭な主柱穴と壁溝を伴うが、2・3号には柱穴及び壁溝などの施設は認められない。カマドの付設方向は、N-30°-W~120°-Eの範疇に収まり時期を経る毎に東へ移動する。時期は、出土遺物から1号住居跡が8世紀後葉、2号が9世紀中葉～後葉、3号が10世紀前葉～中葉に比定される。

土坑・ピットは時期を決定付ける資料に欠けるが、堆積土層が竪穴住居跡と同一であることから、ほぼ同時期に集落の一部を構成したとみられる。

遺物は土師器・須恵器の土器類を主体とし、甕形土器や鉄製品（鎌?）が出土している。なお、須恵器は新治産跡群の製品で占められていた。

### 2. 竪穴住居跡

1号住居跡（SI01 第7・8図、第2表、PL1・2・4）

**位置** 調査区南部で標高25.0m地点に位置する。住居跡の南西隅角が調査区外となる。

**規模** 長軸は東西軸で4.38m、南北軸4.25mを測り、平面形態はほぼ正方形である。また、カマドの前面が平面円形に攪乱されていた。

**主軸方向** N-30°-W。

**壁** 確認面からの深さは50~64cmで、緩やかにち上がる。

**壁溝** 壁溝は、西壁と東壁下の一部に確認される。西辺は幅15~20cm、床面よりの深さ18~40cm、断面形はやや圓いた箱形である。東辺は幅10~15cm、床面よりの深さ5~20cmで、断面形は開いたU字状となるが掘り込みは浅い。

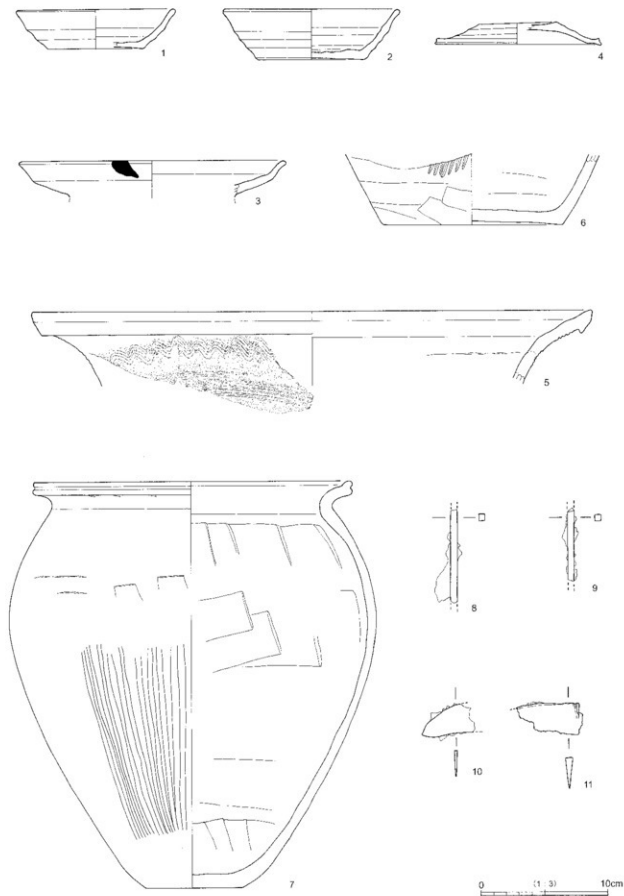
**床面** 床面はローム層の直床で、多少の起伏があり、住居跡の四隅がやや低くなっている。硬化面は認められていない。

**ピット** 8本が確認され、このうちP1~P4が主柱穴に相当する。規模は、P1が径47×37cm、深さ29cmの楕円形、P2が径33cm、深さ26cmの円形、P3が径29cm、深さ37cmの円形、P4が径40×37cm、深さ35cmの円形、P5が径21×19cm、深さ23cmの円形、P6が径26×24cm、深さ24cmの円形、P7が径30cm、深さ24cmの円形、P8が径23cm、深さ14cmの円形である。

**カマド** 北壁の中央に付設され、主軸方向は住居跡とほぼ一致する。規模は、全長90cm、燃焼部幅52cmである。煙道は屋外へかけ僅かに掘り込み、燃焼部から急激に立ち上がり段をもって屋外へ至る。燃焼部の中央には火床面が認められ、径30cmの円形に赤変する。袖の構築にあたっては山砂に粘土を混合した褐灰色土を用いているが、天井部は残存していない。掘り方は煙道を方形気味に削り込み、燃焼部は楕円形に10cmほど掘り窪められていた。

**覆土** 10層が確認された。床面直上と壁際には周堤帯の存在を示すものであろうか、地山に類似した第8・10層の黄褐色土が認められている。この上層にはローム粒を含む第1~6層が堆積するが、床面から出土した遺物番号7の土師器甕は上層と接合関係にあることから、比較的短時間に埋没したと理解される。なお、第7層はカマドからの流失土である。

**遺物** 本跡からは取納箱約1箱分の資料を得ている。土師器杯・甕、須恵器杯・高台付盤・蓋・甕、鉄製品



第8图 1号住居跡出土遺物

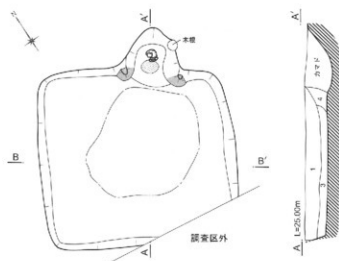
が出土し、大多数は覆土上層からの出土である。従って図示した遺物は、11点のうち前述の遺物図版番号7及び1を除くといずれも覆土上層、とくに土層観察用ベルトで4分割した住居跡西部に集中していた。遺物図版番号1の須恵器環はカマド内の出土遺物で、3の須恵器高台付盤には判読不明の墨書とみられる痕跡が確認されている。なお、4の須恵器の蓋は明瞭なかえしが認められず、時期的には9世紀後葉の所産で、本遺構には伴わない遺物と理解される。6の須恵器の蓋もまた、僅かに残された印の痕跡が縦位であることから9世紀代の可能性を有し、本遺構に帰属しない遺物とみられる。須恵器については新治窯跡群の製品で占められていた。

**所見** 本遺構の床面には硬化は認められず、カマドの状況からも使用痕跡は乏しい。時期については、住居跡の規模及び明瞭な主柱穴を伴う構造と、遺物図版番号2の底径が大きい須恵器環や、7の上層器蓋から8世紀後葉としておく。なお、4の須恵器蓋や6の須恵器蓋は流れ込みと判断した。

第2表 1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・成色・色調(内、外)	備考
1	須恵器 環	口径 (12.8) 底径 (7.5) 器高 3.0	底部は平式で、体部は内湾気味に立ち上がる。	底部手持ちヘラケズリ。	長石・石英・雲母・白色粘多量 明褐色灰色 (7.5YR7/1)	1/3 存 カマド内出土 良好
2	須恵器 環	口径 (13.5) 底径 8.4 器高 4.0	底部は平式で、体部は直筒状に立ち上がる。	底部手持ちヘラケズリ。	長石・石英・雲母・白色粘中量 明褐色灰色 (7.5YR7/1)	口縁～底部片 覆土上層出土 良好
3	須恵器 高台付盤	口径 (21.0) 底径 (2.9)	口縁部との境にふいせをもつ。	調整痕不明。	長石・石英・雲母・白色粘中量 灰白色 (7.5YR8/1)	口縁部片 外面に曇度 覆土上層出土
4	須恵器 蓋	口径 13.0 底径 - 器高 (1.8)	天井部は平式で、口唇部は面をなす。かえりは認められない。	天井部外面に同軸ヘラケズリ。	長石・石英・白色粘多量 灰色 (5A1)	体部片 覆土上層出土
5	須恵器 蓋	口径 (42.0) 底径 - 器高 (5.8)	大口径で、波状文を施す。	ナゲ。	長石・石英・白色粘多量 灰色 (5A1)	口縁部片 覆土上層出土
6	須恵器 蓋	口径 - 底径 14.0 器高 (5.5)	バケツ型の形状とみられる。底部は平式で、胴部は直線的に立ち上がる。	胴部外面下半縦位の印、下半縦位のヘラケズリ、内面ナゲ。	長石・石英・雲母・白色粘中量 明褐色灰色 (7.5YR7/2)	底部～胴部上半片 覆土上層出土
7	須恵器 蓋	口径 (24.8) 底径 7.5 器高 32.0	常盤型。底部は平式で胴部上半に最大径をもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は1方につまみ出される。	胴部外面上半縦位のヘラケズリ、下半縦位のヘラミガキ、下半縦位のヘラケズリ、内面ヘラナゲ、口縁部ヨリナゲ。	長石・石英・雲母中量 褐色 (7.5YR7/6)	2/3 存 下半に煤付着 墨書・覆土上層 出土
8	鉄製品 不明品	長さ (7.2) 幅 0.5 厚さ 0.5	棒状で断面は矩形である。			覆土上層出土
9	鉄製品 不明品	長さ (5.5) 幅 0.5 厚さ 0.6	棒状で断面はやや丸味をもつが、基本的には矩形である。			覆土上層出土
10	鉄製品 鎌?	長さ (4.1) 幅 1.9 厚さ 0.2	切先部分とみられ、極かに湾曲する。			切先片 覆土上層出土
11	鉄製品 鎌?	長さ (5.5) 幅 2.4 厚さ 0.5	折り返しと認められることから、鎌の茎部片とみられる。			茎部片 覆土上層出土



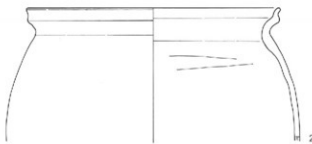
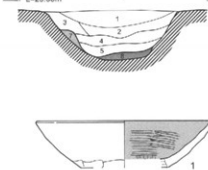
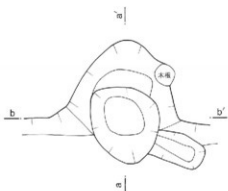
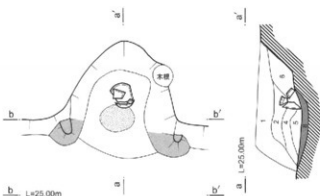
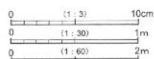


2号住居跡上層説明

- 1 褐色土 7.5YR4/4 ローム粒まばらに含む。しまり有、粘性弱。
- 2 褐色土 7.5YR4/3 ローム粒まばらに含む。しまり有、粘性弱。
- 3 褐色土 7.5YR4/5 ローム粒まばらに含む。しまり有、粘性弱。
- 4 褐色土 7.5YR4/3 ローム粒・ローム片が若干含まれる。まばらに含む。しまり有、粘性弱。

2号住居跡カマド上層説明

- 1 褐色土 7.5YR4/3 ローム粒まばらに含む。しまり有、粘性弱。
- 2 褐色土 7.5YR4/1 ローム粒・焼土粒・灰多量に含む。しまり有、粘性弱。
- 3 黄褐色土 10YR5/9 ローム粒まばらに含む。しまり有、粘性弱。
- 4 褐色土 7.5YR4/6 ローム粒・焼土粒・灰まばらに含む。しまり有、粘性弱。
- 5 暗赤褐色土 5YR3/6 ローム粒・焼土粒多量に含む。しまり有、粘性弱。
- 6 暗赤褐色土 5YR3/6 ローム粒・焼土粒まばらに含む。しまり有、粘性弱。
- 7 褐色土 7.5YR5/1 砂粒と粘土の混合土。しまり有、粘性弱。
- 8 褐色土 7.5YR4/1 ローム粒・焼土粒・灰化砂多量に含む。しまり有、粘性弱。



第9図 2号住居跡・出土遺物

第3表 2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成・色調(内/外)	備考
1	土師器 杯	口径 (13.8) 底径 (6.8) 高さ (3.7)	体部は内湾気味に立ち上がる。	体部外面下縁手持ちヘラケズリ、内面ヘラミガキ。	長石・石英・白色粒中量 暗赤褐色 (5YR3/4)	体部片 内面黒色処理 覆土下層出土
2	土師器 甕	口径 (20.0) 底径 - 高さ (10.5)	胴部上半に最大径をもつとみられる。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は上方へつまみ出される。	胴部内面ヘラナゲ、口縁部ヨコナゲ。	長石・石英・砂粒多量 暗赤褐色 (5YR5/6)	口縁へ胴部上半 片 カマド内出土

## 2号住居跡 (SI02 第9図、第3表、PL2・4)

**位置** 調査区南東部で標高25.2m地点に位置する。住居跡の南東隅角が調査区外となる。

**規模** 長軸は東西軸で3.08m、南北軸2.85mを測り、平面形態はほぼ正方形である。

**主軸方向** N-25°E。

**壁** 確認面からの深さは33~41cmで、垂直気味に立ち上がる。

**床面** 床面はローム層の直床で、カマド前面から住居跡中央へかけて硬化し、使用痕跡と理解される。

**カマド** 北壁の中央に付設され、主軸方向は住居跡とはほぼ一致する。規模は、全長94cm、燃焼部幅51cmである。燃焼部及び煙道は屋外へかけて63cmほど掘り込まれ、山砂に粘土を混ぜた褐色土を用いた袖が備かに遺存する。天井部は残存していない。燃焼部から煙道へは急激に立ち上がり、燃焼部の中央には径26×22cmの楕円形の火床面が認められ、赤変硬化する。燃焼部には土師器の裏の胴部片が直立した状態で出土し、支脚として用いられたものと判断される。掘り方は燃焼部を中心として円形に6cmほど掘り窪められていた。

**覆土** 4層が確認された。ローム粒を含んだ褐色土を主体とし、壁際にはローム粒とロームブロックを含有した第4層の褐色土が堆積する。

**遺物** 本跡からの出土遺物は少ない。土師器杯・甕、須恵器環で、このうち床面から出土した遺物図版番号1の土師器杯とカマド内の土師器甕を掲載した。

**所見** 床面より出土している内面に黒色処理を施した土師器杯(遺物図版番号1)と、カマド内の土師器甕から9世紀中葉~後葉の年代が与えられる。

## 3号住居跡 (SI03 第10・11・12図、第4表、PL2・3・4・5)

**位置** 調査区南部で標高24.3m地点に位置する。住居跡の北と南には耕作による攪乱が入り、北東隅角が斜面部となって消失している。また、カマドの前面が上部より平面円形に攪乱されていた。

**規模** 長軸は南北軸で3.33m、東西軸3.28mを測り、平面形態は隅角にやや丸味をもった正方形である。

**主軸方向** N-120°E。

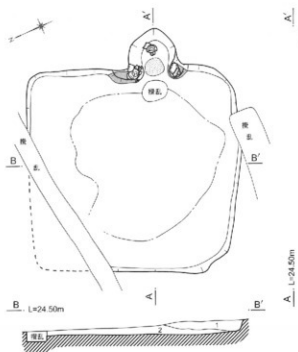
**壁** 確認面からの深さは最も遺存状態の良い南東隅で30cmを計測し、南壁は垂直気味に立ち上がる。

**床面** 床面はローム層の直床で、住居跡中央部がやや高くなる。カマド前面から住居跡中央へかけて広く硬化面し、使用痕跡と理解される。

**カマド** 東壁の中央に付設され、主軸方向は住居跡とはほぼ一致する。天井部は残存していないが、カマド内には焼土粒・焼土ブロック・炭化粒を含んだ暗赤褐色土が堆積する。規模は、全長120cm、燃焼部幅40cmである。燃焼部及び煙道は屋外へかけて60cmほど掘り込まれている。袖には遺物図版番号7~10の甕が構材として用いられていた。燃焼部から煙道へは緩やかに移行し、燃焼部の中央には径31cmで円形の火床面が認められ、赤変硬化する。また、燃焼部には支脚とみられる長さ24.5cm、幅10.5cm、厚さ7cmの片岩が直立し、その上に遺物図版番号3の土師器高台付甕が伏せた状態で検出された。カマドの廃絶に伴う祭祀行為の痕跡と判断される。掘り方は燃焼部を中心として円形に11cmほど掘り窪められていた。

**覆土** 3層が確認された。主体となる第2層はローム粒・焼土粒・炭化粒を多量に含んだ褐色土で、西壁際にはローム粒を含有した第3層の暗褐色土が堆積する。

**遺物** 本跡からは取箱2/3ほどの出土品が得られている。内訳は、土師器杯・高台付甕・甕、須恵器甕、灰箱陶器碗、土製品の甕形土器である。その大多数はカマド内の出土であり、遺物図版番号7~10の甕は袖の構材として用いられていた。1と5は土層観察用ベルトで4分割した北東部、13の甕形土器は北東部の出土である。甕形土器は大型品の炊1部片で、ヘラ状工具により彫形され、被熱痕は認められていない。11・

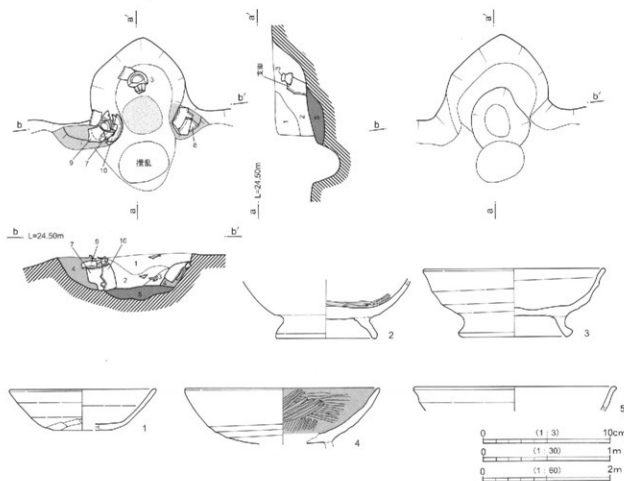


3号住居跡土層説明

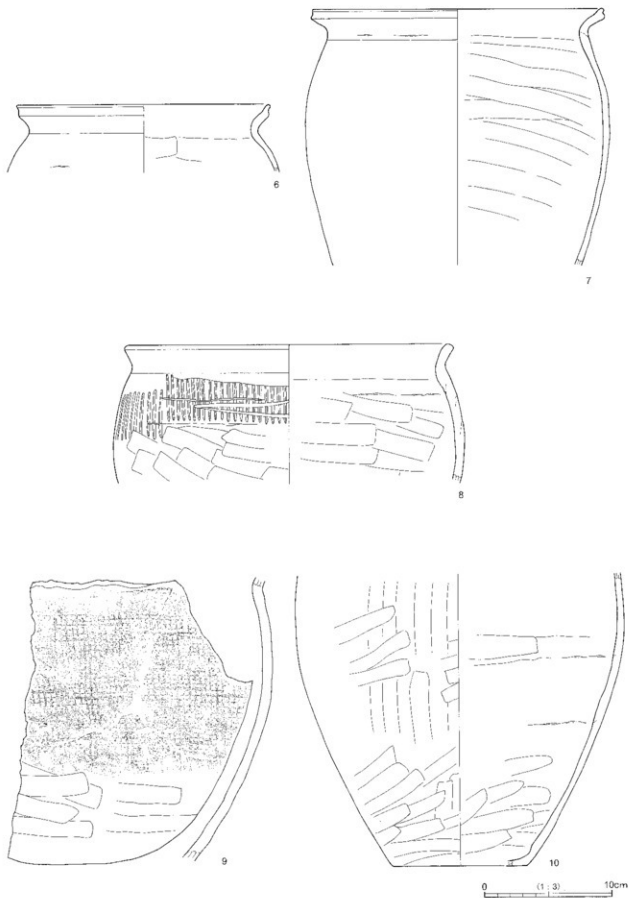
- 1 地色土 7.51K4/3 ローム粒・ロームブロックφ1〜5cm程度ばらに含む、しまり有、粘性弱。
- 2 褐色土 7.51K4/4 ローム粒・磁土粒・炭化灰多量に含む、しまり有、粘性強。
- 3 暗褐色土 7.51K3/4 ローム粒まばらに含む、しまり有、粘性弱。

3号住居跡カマド土層説明

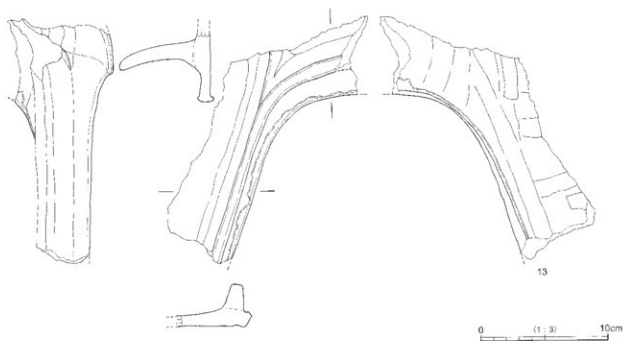
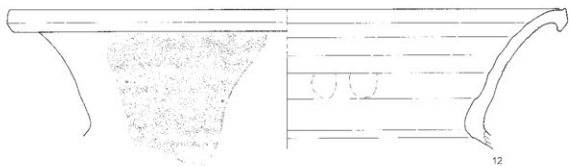
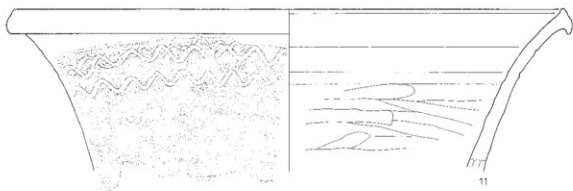
- 1 緑赤褐色土 2.5YR3/2 磁土ブロックφ1〜5cm程、焼土塊多量に含む、しまり有、粘性強。
- 2 緑赤褐色土 2.5YR3/2 磁土粒・磁土塊まばらに含む、しまり有、粘性強。
- 3 緑赤褐色土 2.5YR3/2 泥土粒・炭化灰少量含む、しまり有、粘性強。
- 4 黄褐色土 7.5YR6/1 山砂と粘土の混合土、しまり有、粘性弱。
- 5 黄褐色土 7.5YR2/1 ローム粒・粘土粒・炭化灰多量に含む、しまり有、粘性強。



第10図 3号住居跡・出土遺物(1)



第11图 3号住居跡出土物(2)



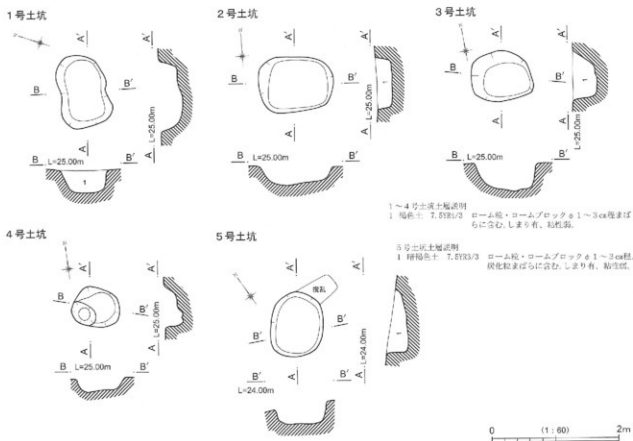
第12图 3号住居跡出土遺物(3)

12の須恵器の大甕は、カマドの上面から検出されている。

所見 カマドの構材に用いられた、遺物図版番号9の酸化焙焼成の甕は格子目印が施されたもので、9世紀末から10世紀に比定されるが、住居跡の時期については廃絶時のカマド祭祀に用いられたとみられる土師器の椀などから、10世紀前半～中葉の年代が与えられる。

第4表 3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・焼成・色調(内、外)	備考
1	土師器 椀	口径 径 (11.4) 底径 (4.0) 器高 3.2	底部は平底で、腰部は直線状に立ち上がり、口縁部はやや肥厚する。	底部及び腰部下端半持ちヘラケズリ。	長石・石英・毒母中量にふい褐色(7.5YR5/4)良好	1/4存 覆土上層出土
2	土師器 高台付碗	口径 径 - 底径 8.0 器高 (4.5)	高台を1ハ、の字状に貼り付け、腰部は内溝しながら立ち上がる。	腰部内面ヘラミガキ、高台口クロナデ。	長石・石英・砂粒多量 褐色(7.5YR7/6) 良好	腰部～底部片 覆土上層出土
3	土師器 高台付碗	口径 径 9.2 底径 14.2 器高 5.4	高台は「ハ」の字状で、胴部が外側に開く。腰部は内溝して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	腰部・高台共にクロコナデ。	長石・石英中量にふい褐色(7.5YR5/4)良好	2/3存 カマド内出土
4	土師器 高台付碗	口径 径 15.1 底径 15.1 器高 (4.4)	腰部は内溝気味に立ち上がる。	腰部外面下端回転ヘラケズリの後ナデ、内面ヘラミガキ。	長石・石英・白色粒中量 明褐色(7.5YR7/2) 良好	底部欠損 内面黒色処理 カマド内出土
5	灰釉陶器 甕	口径 径 (15.7) 底径 - 器高 (2.0)	口唇部は肥厚してやや外反する。		白色粒少量 灰白色(10YR7/1) 良好	口縁部片 覆土中出土
6	土師器 甕	口径 径 (19.8) 底径 - 器高 (5.4)	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は上方へつまみ出される。	胴部内面ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	長石・石英・砂粒多量 暗褐色(5YR5/6) 良好	口縁部片 カマド内出土
7	土師器 甕	口径 径 (22.7) 底径 - 器高 (20.3)	胴部上半に最大径をもち、口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は上方につまみ出される。	器部が荒れているため、胴部外面の整形痕は不明、内面ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	長石・石英・砂粒中量 褐色(7.5YR7/6) 良好	口縁～胴部片 抽検材
8	土師器 甕	口径 径 (25.5) 底径 - 器高 (11.0)	口縁部は「く」の字状に外反する。	胴部外面のヘラケズリ、内面ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	長石・白色粒少量にふい褐色(7.5YR7/4)良好	口縁～胴部上半片 煤付雲 抽検材
9	須恵器 甕	口径 径 - 底径 - 器高 (22.0)	口縁部は外反するとみられる。	胴部外面上半格子目印、下半横位のヘラケズリ、内面ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	長石・石英・白色粒中量 褐色(7.5YR7/6) 良好 酸化輝焼成	胴部上半片 抽検材
10	土師器 甕	口径 径 - 底径 - 器高 (23.0)	底部は平底とみられ、胴部中程に最大径をもつ。	胴部外面縦位の後、横位のヘラケズリ、内面ヘラナデ。	長石・石英・毒母・砂和少量にふい褐色(7.5YR3/4)良好	胴部下半片 抽検材
11	須恵器 甕	口径 径 (43.0) 底径 - 器高 (12.8)	口縁部は大きく開き大口径である。絞状文を施す。	内面ヘラナデ。	長石・白色粒多量 灰色 良好	口縁部片 カマド上層出土
12	須恵器 甕	口径 径 (44.0) 底径 - 器高 (10.0)	口縁部は大きく開き大口径である。絞状文を施す。	内面拓痕後。	長石・白色粒中量 灰色(9M1) 良好	口縁部片 カマド上層出土
13	土製品 壘形土器	高 幅 厚 底径 (19.0) (16.0) 0.8～1.0 1.0～1.5	飲口は下縁が広く上部が水皿になるとみられる。竹箆で飲口の周縁に粘土を貼り付ける。底部はヘラ状工具により面取りがなされる。	外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石・石英・砂粒多量 褐色(7.5YR5/6) 良好	飲口片 別段な被熱痕は認められない。 覆土の上出土



第13図 1～5号土坑

第5表 ビットー覧表

番号	形態	堆積土層	規模 長軸×短軸×深(cm)	番号	形態	堆積土層	規模 長軸×短軸×深(cm)
01	不明	褐色土	56×26以上×27	05	円形	褐色土	30×29×46
02	楕円形	褐色土	35×27×41	06	円形	褐色土	49×49×41
03	円形	褐色土	36×33×57	07	円形	褐色土	28×27×57
04	円形	褐色土	51×46×64				

### 3. 土坑

#### 1号土坑 (SK01 第13図、Pl.3)

**位置** 調査区南東部に標高25.1m地点に位置する。1～4号土坑はまとまりをみせ1号住居跡に近接する。

**規模** 長軸は東西軸で1.14m、南北軸0.78m、深さ0.28～0.34mを測る。

**平面形態と主軸方向** 平面形態は隅角にやや丸味をもった楕円形で、長軸方向はN-57°-Eを示す。

**底面と壁面** 底面は西側が低くなり、壁は下端に丸味をもちながら立ち上る。

**覆土** ローム粒・ロームブロックをまばらに含んだ褐色土の単層である。

**遺物** 掲載しなかったが、土師器坏の細片が出土している。

**所見** 覆土の状況と出土遺物から奈良・平安時代の所産とみられる。

#### 2号土坑 (SK02 第13図、PL3)

**位置** 調査区南東部で標高25.1m地点に位置する。1～4号土坑はまとまりをみせ1号住居跡に近接する。

**規模** 長軸は東西軸で1.18m、南北軸0.89m、深さ0.17～0.27mを測る。

**平面形態と主軸方向** 平面形態は隅角にやや丸味をもった楕円形で、長軸方向はN-90°-Eを示す。

**底面と壁面** 底面は西側が低くなり、壁は下端に丸味をもちながら立ち上がる。

**覆土** ローム粒・ロームブロックをまばらに含んだ褐色土の単層である。

**遺物** 掲載しなかったが、須恵器環と土師器の細片が出土している。

**所見** 覆土の状況と出土遺物から奈良・平安時代の所産とみられる。

#### 3号土坑 (SK03 第13図、PL3)

**位置** 調査区南東部で標高25.1m地点に位置する。1～4号土坑はまとまりをみせ1号住居跡に近接する。

**規模** 長軸は東西軸で0.94m、南北軸0.80m、深さ0.37～0.40mを測る。

**平面形態と主軸方向** 平面形態は隅角に丸味をもった楕円形で、長軸方向はN-90°-Eを示す。

**底面と壁面** 底面は南側がやや低くなり、壁は下端に丸味をもちながら立ち上がる。

**覆土** ローム粒・ロームブロックをまばらに含んだ褐色土の単層である。

**遺物** 掲載しなかったが、須恵器甕の細片が出土している。

**所見** 覆土の状況と出土遺物から奈良・平安時代の所産とみられる。

#### 4号土坑 (SK04 第13図、PL3)

**位置** 調査区南東部で標高25.1m地点に位置する。1～4号土坑はまとまりをみせ1号住居跡に近接する。

**規模** 長軸は東西軸で0.71m、南北軸0.61m、深さ0.17～0.28mを測る。

**平面形態と主軸方向** 平面形態は隅角に丸味をもった楕円形で、長軸方向はN-60°-Wを示す。

**底面と壁面** 底面は西側が径44×30cm、深さ9cmで一段低くなり、壁は丸味をもって立ち上がる。

**覆土** ローム粒・ロームブロックをまばらに含んだ褐色土の単層である。

**遺物** 遺物は出土していない。

**所見** 覆土の状況から奈良・平安時代の所産とみられる。

#### 5号土坑 (SK05 第13図、PL3)

**位置** 調査区北西部で標高23.5m地点の斜面部に位置し、東側が傾乱される。

**規模** 長軸は南北軸で1.04m、東西軸0.84m、深さ0.04～0.39mを測る。

**平面形態と主軸方向** 平面形態は隅角にやや丸味をもった楕円形で、長軸方向はN-43°-Eを示す。

**底面と壁面** 底面はほぼ平里であり、壁は下端に丸味をもちながら垂直気味に立ち上がる。

**覆土** ローム粒・ロームブロック・炭化粒をまばらに含んだ暗褐色土の単層である。

**遺物** 掲載しなかったが、須恵器高台付環の細片が出土している。

**所見** 覆土の状況と出土遺物から奈良・平安時代の所産とみられる。

#### 4. ビット

調査では7基のビットが検出されている。いずれも標高24.8～25.1mの台地縁辺部に位置し、堅穴住居跡や土坑に近接するものの規則性はうかがわれない。形態・堆積土層・規模の詳細については一覧表に記載したが、調査区外となり内容が不明なP01と、楕円形の形態をとるP02以外は円形となっていた。規模は径28～56cm、深さ27～64cmの範囲に収まり、覆土はローム粒・炭化粒を含有した褐色土の単層であった。



## 第5章 総括

谷原門C遺跡は、平成13年刊行の『茨城県遺跡地図』において縄文時代から中世へかけての集落跡とされている。調査は、台地上に広がる遺跡の西端部に実施されたもので、限られた範囲ながら8世紀後半～10世紀中葉の竪穴住居跡と土坑・ピットが確認された。集落の中心は周辺の地形や遺物の散布状況により、調査区の東から南の台地上平坦部に展開するとみられ、調査では集落の北西端を明らかにしたといえる。さらに、遺構は検出されなかったが、少量の縄文時代前・中期の土器資料が得られた。数量では、前期黒浜式期が多数を占め、中期においても初頭の五須ヶ台式期を下限とするなど、前期を主体とした展開が示唆される。遺跡の東端で行われた第1次調査の成果を加味すると、おそらく縄文時代の遺構はほかの時代に対して客体的に存在するものであろう。

本調査の成果において特筆される点は、3号住居跡のカマドの廃絶状況と甕形土器の出土にある。

3号住居跡は10世紀前半～中葉に比定される。カマドは袖の構材に土師器の明臺を用いており、燃焼部に直立した石製支脚の上部に、土師器の高台付椀が伏せた状態で載せられていた。東京都多摩ニュータウンNo.512遺跡でも同様な事例が報告されており、廃絶時に行われた「雷神」に対する祭祀行いと理解される。

甕形土器は、住居跡を四分割した北東部分の覆土中から出土したものである。茨城県では平成9年時点で6世紀前半を最古に22例の大甕品が知られている。平安時代の事例が多く、10年を経た現在、実数は増加していると推測される。甕形土器については、5世紀後半に渡来系氏族により畿内にもたらされたもので、小型と大甕品に大別されている。大甕品は別火の信仰に奉仕する甕として普及・発達し、仏教をはじめとする多様な祭祀に用いる非日常的な祭具とする説や、土器生産集団と密接な関わりがある可動式の火炊とする説が出されている。黒澤氏の編年によると、体部が円筒形もしくは内傾して直線的に立ち上がる形態が平安時代の特徴とされる。今回の資料は、山桜川村の岡ノ内遺跡や旧千代用村の野方台遺跡の出土品と類似し、被熱の痕跡は認められない。この編年を援用すると10世紀代の所産に比定され、3号住居跡の年代ともほぼ合致する。土浦市内の土土例としては、烏山の南丘遺跡、上高津の寄居遺跡、今泉の根鹿北遺跡などがある。根鹿北遺跡では9世紀前半～中葉頃とみられる掘立柱建物群が検出された。瓦塔・瓦堂や「佛」の墨書土器が出土し、仏教関連施設が存在が示唆されており、7世紀末に操業した栗山窯跡が隣接する。

谷原門C遺跡の性格については、奈良・平安時代の集落跡に位置付けられるものの、内部構造は不明であり、甕形土器の用途についてもまた明らかではない。本遺跡南の扇ノ台遺跡では、8世紀前半～9世紀前半に盛期をもった企画性のある掘立柱建物群と仏教関連の墨書土器から、中家邸の拠点集落、あるいは郷家と考えられており、10世紀へかけて衰退することが明らかとなっている。3号住居跡の資料は、10世紀代を補うものであり、周辺の調査成果と共にこの地域の歴史を理解する上で重要な事例といえる。

### 引用・参考文献

- 浅井哲也 1992 「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅰ）」『研究ノート』創刊号 財団法人茨城県教育財団  
浅井哲也 1993 「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅱ）」『研究ノート』2号 財団法人茨城県教育財団  
湯原勝美 1995 「集落内出土の甕形土器—東北南部から房総地方の出土例を中心として—」『研究紀要』創刊号 山武考古学研究所  
黒澤秀雄 1997 「古墳時代の壘カマドについて」『研究ノート』6号 財団法人茨城県教育財団  
土浦市教育委員会 土浦市遺跡調査会 1999 「谷原門遺跡C地点発掘調査報告書 倉庫新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—」  
土浦市教育委員会 土浦市遺跡調査会 1999 「扇ノ台遺跡 古代編—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」

写 真 图 版



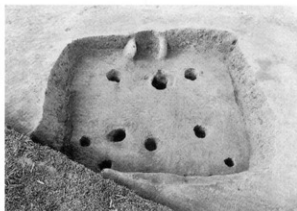
調査区全景 (南東から)



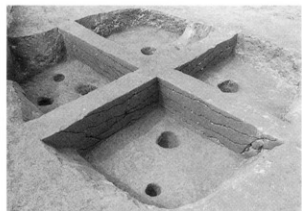
同 現況 (南東から)



基本堆積土層 (西から)



1号住居跡 全景 (南東から)



同 土層断面 (東から)



1号住居跡カマド全景 (南東から)



同 カマド袖断面 (南東から)



2号住居跡 全景 (南西から)



同 土層断面 (南東から)



同 カマド内遺物出土状況 (南東から)



同 カマド調査状況 (南東から)



3号住居跡 全景 (北西から)



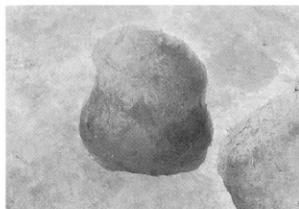
同 カマド調査状況 (北西から)



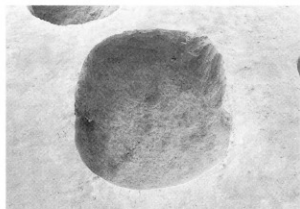
3号住居跡 カマド内遺物出土状況 (北西から)



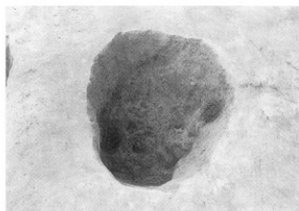
同 カマド発掘全景 (北西から)



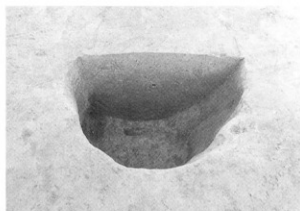
1号土坑 全景 (西から)



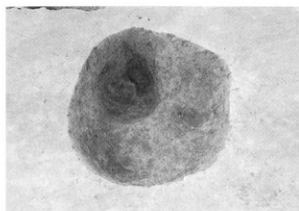
2号土坑 全景 (東から)



3号土坑 全景 (東から)



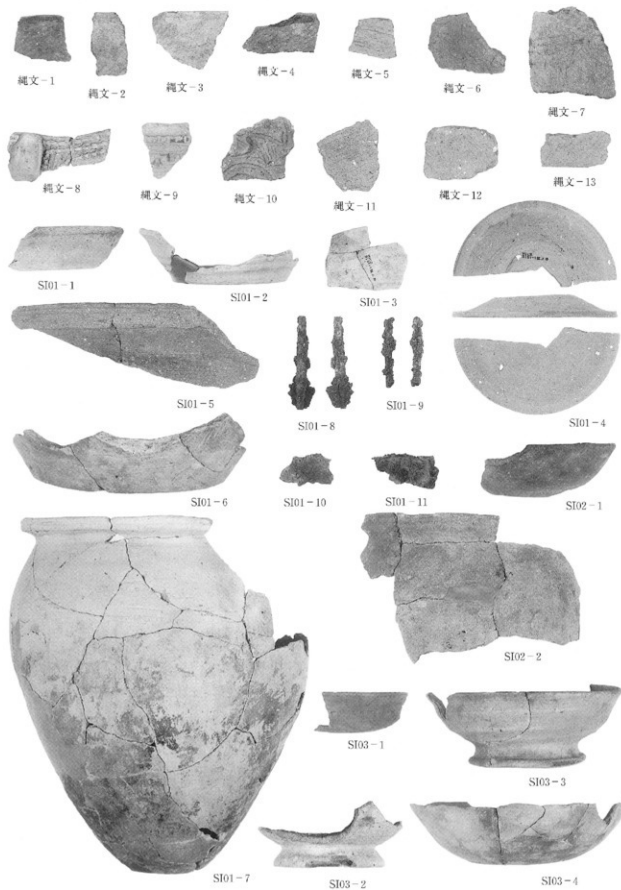
同 土層断面 (東から)



4号土坑 全景 (東から)



5号土坑 全景 (北から)





SI03-5



SI03-6



SI03-8



SI03-7



SI03-10



SI03-9



SI03-11



SI03-12



SI03-13

## 報告書抄録

ふりがな	やわらかどしいいせき (だいにじちようき)							
書名	谷原門C遺跡 (第2次調査)							
副書名	宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	松田政基 劉宮正光 黒澤春彦							
編集機関	山武考古学研究所 〒286-0045 千葉県成田市並木町221番地 TEL 0476 24 0536							
発行機関	上浦市教育委員会							
発行年月日	西暦2007年7月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	道路番号	° ' "	° ' "			
谷原門C遺跡	茨城県土浦市中学谷原門 1472-1番地	08203	005	36° 02' 51.4880"	140° 10' 40.2138"	20070312 ～ 20070326	500㎡	宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
谷原門C遺跡	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡 3軒 土坑 5基 ピット 7基	土 師 器 : 環・高台付椀・甕 須 恵 器 : 環・高台付外・高台付甕・ 蓋・甕 灰釉陶器 : 碗 上 製 品 : 露形土器 鉄 製 品 : 鏃?・不明品 石 製 品 : 支脚		確認された竪穴住居跡は、奈良・平安時代の所産である。10世紀前半～中葉に比定される3号住居跡からは、廃絶時に行われたカマド祭祀の遺跡と露形土器が出土し、貴重な資料が得られている。		
要約	調査は、台地上に広がる遺跡の西端部に実施されたもので、8世紀後半、9世紀中葉～後半、10世紀前半～中葉の竪穴住居跡が確認された。集落の中心は、調査区の東から南へかけての台地上に展開するとみられ、調査では集落の北西端を明らかにした。							

### 谷原門C遺跡 (第2次調査)

- 宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

印刷 平成19年7月27日  
 発行 平成19年7月31日  
 編集 山武考古学研究所  
 発行 上浦市教育委員会  
 印刷 株式会社 東 プ リ  
 TEL 047 (440) 7444